

平成 22 年 6 月 2 日現在

研究種目：	基盤研究(C)
研究期間：	2007 ~ 2009
課題番号：	19520033
研究課題名(和文)	ヘレニズム哲学におけるアカデメイアとピュロン派懐疑主義の位置づけとその現代的意義
研究課題名(英文)	The Roles Academic and Pyrrhonian Types of Skepticism Played in Hellenistic Philosophy and their Modern Significance
研究代表者	
金山 万里子	(Kanayama Mariko)
大阪医科大学・医学部・教授	
研究者番号：	10093189

研究成果の概要(和文):近世哲学の発展に多大の影響を与えたセクストス・エンペイリコス(紀元 200 年頃)の著作に認められるピュロン派懐疑哲学は、それまでの懐疑主義的議論、なかんずく前 3 世紀に懐疑主義に転換したアカデメイア派の諸議論を取り入れつつ、ギリシア認識論を集大成し、哲学の全領域を反省的に振り返るものであった。本研究では、セクストス著作におけるピュロン派、アカデメイア派の諸議論を通して、古代懐疑主義の特徴を明らかにし、現代認識論への新たな視点を提供しよう試みた。

研究成果の概要(英文): Pyrrhonian skepticism in Sextus Empiricus (c. 200 CE), which had a great influence on the development of modern philosophy, drew on preceding skeptical arguments, especially those of ancient Academy, which had turned to skepticism in the 3rd century BCE. Sextus develops his skeptical arguments against all fields of philosophy in such a systematic way that his works can be regarded as a reflective compilation not only of Greek epistemology but also of all the branches of ancient philosophy. We tried in this project to make clear both the characteristics of ancient skepticism and the significance it has for modern epistemology.

交付決定額

(金額単位:円)

	直接経費	間接経費	合計
2007 年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2008 年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野:古代ギリシア哲学

科研費の分科・細目:哲学・倫理学

キーワード:懐疑、ヘレニズム哲学、セクストス・エンペイリコス、アカデメイア、認識、自然学、倫理学、相対主義

1. 研究開始当初の背景

(1) 西洋哲学史研究の領域において今日世界的に最も活況を呈しているヘレニズム哲学の研究は、1974 年の A.A. Long,

Hellenistic Philosophy, London の出版がその端緒を開き、とくに 1980 年代以降、懐疑主義(アカデメイア派、ピュロン派懐疑主義)対ドグマティスト(ストア派、エピクロス派、

専門諸科学)の諸論争を核として活発に展開され、その過程で、ヘレニズム哲学各派の認識論、自然学、倫理学に関する重要な研究成果が次々に発表された。そうした成果に基づく記念碑的業績と呼びうるのが A. A. Long & D. N. Sedley, *The Hellenistic Philosophers*, 2 vols, Cambridge, 1987 と K. Algra, J. Barnes, J. Mansfeld & M. Schofield (eds.), *The Cambridge History of Hellenistic Philosophy*, Cambridge, 1999 である。

本研究は、ヘレニズム哲学の内、古代懐疑主義、及び懐疑主義対ドグマティズムの論争に焦点を絞った。これは、1980年代に入り M. Schofield, M. Burnyeat & J. Barnes (eds.), *Doubt and Dogmatism*, Oxford, 1980; M. Burnyeat (ed.), *The Skeptical Tradition*, Berkeley, 1983 などの論文集に結実する総合的・競合的研究によって、その独自性と重要性が注目されはじめた分野である。

(2) このような西洋哲学史研究の世界的趨勢に応じて、1990年代に研究代表者(金山萬里子)と分担者(金山弥平)は、セクストス・エンペイリコス現存全著作の翻訳に着手した。自らもピュロン派懐疑主義者であるセクストスの著作は、古代懐疑主義の立場、および懐疑主義とドグマティズム哲学諸派間の諸論争を詳細かつ中心的に報告する、現存する唯一の哲学書である。しかしそれは、たんに古代懐疑主義の紹介書であるにとどまらず、次の諸点においても哲学的に非常に貴重な資料である。

① 多元的価値観が競合する現代世界において、つねに自己と他者とを吟味の俎上に載せ続ける懐疑的精神は、哲学的・思想的にきわめて重要な意義をもつ。しかし、セクストスによって大成された古代懐疑主義は、懐疑がもたらす実生活上の効用など、その基本的立場において現代の懐疑主義と重要な点で相違している。セクストスの著作が開示する古代懐疑主義の諸特徴は、現代の思想状況が要請する懐疑的精神に対して、現代の懐疑主義の射程を越える新たな視点を提供するものと期待される。

② セクストスは認識論、自然学、倫理学の各分野において、彼が利用しうる限りの議論を種々の文献中に涉猟し、興味深い多様な批判的議論を展開している。例えば、アグリッパの五つの方式(科学の基礎に関する問題提起)、説得的表象に関するカルネアデスの議論(基礎づけ主義によらない行為論)、文化的相対主義と実在論の対立、種々の因果的説明とその有効性、因果的決定論と自由の関係、物体の本質、原子論と連続体説、運動・変化・時間の本質とその存在、数の実在性、善の本質とその存在、

等々である。これらは、現代の認識論、認知科学、科学哲学、倫理学に対しても数々の示唆を提供する論点である。

③ セクストスはその論述のなかで、ストア派、懐疑派アカデメイア、エピクロス派、さらにはソクラテス以前の哲学者たちの思想を客観的かつ詳細に報告しており、彼の著作は原著作そのものの現存しないヘレニズム哲学、初期ギリシア哲学の最重要の資料である。

④ 16世紀におけるセクストスのラテン語訳による古代懐疑主義の再発見は、デカルト、ロック、ヒューム、カントなどをはじめとする近世哲学の認識論的發展に多大の影響を与えた。その観点からも、近世哲学の發展を深く理解するうえで、セクストスの議論の理解は不可欠のものである。

翻訳のこれまでの成果は、『ピュロン主義哲学の概要』(1998年)、『学者たちへの論駁1』(第1巻—第6巻、2004年)、『学者たちへの論駁2 論理学者たちへの論駁』(第7巻—第8巻、2006年)として、いずれも京都大学学術出版会「西洋古典叢書」から出版された。また2003年には研究分担者が、先に言及したヘレニズム哲学研究の草分け的業績である A. A. Long, *Hellenistic Philosophy* の翻訳(『ヘレニズム哲学』、京都大学学術出版会)を出版した。

2. 研究の目的

以上の成果を踏まえて、本申請研究において目的としたのは、

(1) 第一に、セクストス『学者たちへの論駁3 自然学者たちへの論駁、倫理学者たちへの論駁』(第9巻—第11巻)の翻訳をもってセクストス現存全著作の翻訳を完結し、京都大学学術出版会「西洋古典叢書」の第4期刊行の中の一冊として出版すること、及び

(2) 第二に、翻訳の過程で得られた古代懐疑主義に関する新しい知見を深化・発展させることであつた。すなわち、これまでセクストスの翻訳作業に携わるなかで、アカデメイア派懐疑主義とピュロン派懐疑主義の相違、それらがヘレニズム哲学諸学派の学説展開に果たした役割、古代と現代の懐疑主義の相違、古代懐疑主義の諸議論が現代の認識論、科学哲学、倫理学等に対してもつ意義、等の問題について数々のヒントや知見を得ており、その一部は翻訳の解説中にも示していたが、今回、翻訳の完成を契機として、この点のいっそうの發展を図り、その成果を積極的に発表していきたいと考えた。

3. 研究の方法

哲学史研究を促進する非常に大きな要素の一つに、信頼しうる翻訳がある。セクストス・エンペイリコス全著作の翻訳完成を中心課題とする本研究においてまず目指したのは、正確な翻訳であった。そのため、これまでもセクストス翻訳の共同作業において行なってきたことであるが、研究代表者と研究分担者は、訳者間で作業分担を行わず、翻訳、訳注、解説等の全体にわたって詳細にわたる相互チェックと批判的検討を繰り返した。

セクストスの翻訳としては、英語全訳に、Bury のロウブ古典叢書英訳(1933-1949年)、『ピュロン主義哲学の概要』訳として、Annas & Barnes の英訳(1994年)、Hossenfelder の独訳(1985年)、『学者たちへの論駁』訳として、Bett の第7巻—第8巻英訳(2005年)、同訳者による第11巻注釈付き英訳(1997年)、Flückiger の第7巻—第11巻独訳(1998年)などがある。このうち、Bury 訳は、現在の研究水準から見ると誤解とも呼ぶべき諸点を含む不十分なものである。またその他の訳は、それぞれ別の研究者によるセクストス著作の一部のみの翻訳であり、全体的視野と統一性に欠ける面がある。さらに懐疑主義とその批判対象となるストア派、エピクロス派の立場についても、Bett の第11巻訳を除けば説明に乏しいし、また説明が行なわれている場合でも、最新の研究成果が反映されているとは必ずしも言えない。

それに対して研究代表者と研究分担者は、セクストス全現存著作にわたって、最初から学術用語の統一を意図して翻訳に携わった。また、ヘレニズム哲学の諸思想、および懐疑主義の基本的立場についても読者の理解が深まるように、かなり大部の脚注のほかにも詳細な補注と解説を加えてきた。その方法を今回も踏襲し、その目的に向けて、セクストスの議論の背景を形成する哲学諸思想、すなわち、初期ギリシア哲学、プラトン、アリストテレス、またとくにストア派、エピクロス派、アカデメイア派などヘレニズム哲学の諸思想をも並行して研究し、さらには次々に発表される研究書、研究論文をフォローしつつ、信頼しうる解釈とそうでない解釈を区別して、前者を注や補注に盛り込むことを心がけた。

4. 研究成果

(1) 成果の一つとして、翻訳『学者たちへの論駁 3 自然学者たちへの論駁、倫理学者たちへの論駁』(第9巻—第11巻)の完成(9月頃、京都大学学術出版会より出版予定)を挙げることができる。

これによって、セクストス・エンペイリコスの全著作——『ピュロン主義哲学の概要』

全3巻と『学者たちへの論駁』全11巻——の翻訳を完結することができた。「3. 研究の方法」で述べたように、本翻訳では翻訳の読みやすさ・正確さに加えて、訳語の統一および詳細な脚注・補注の整備をも心がけた。その結果、これらの点で、他のどのセクストス訳(英訳、独訳、仏訳、イタリア語訳)にも勝る翻訳を世に送ることができたと確信している。

セクストスは、『ピュロン主義哲学の概要』第1巻においては、古代懐疑主義の立場を紹介し、また同書第2巻—第3巻、および『学者たちへの論駁』第7巻—第11巻では、それまでのギリシア哲学全般、しかしまたとくにヘレニズム哲学の諸学派を主要論敵として、認識論、論理学、自然学、倫理学の全領域にわたって批判を展開し、さらに同書第1巻—第6巻では、当時の文法、弁論術、幾何学、数論、天文学(占星術)、音楽について懐疑主義的議論を繰り広げている。本研究の成果として日の目を見たセクストス全著作の翻訳は、古代哲学の全領域、および古代人文学・科学の主要領域にわたり、古典語の知識を欠く読者にも古代哲学の諸領域に及ぶ重要な基礎資料を提供するものである。

とくにわが国では、これまではプラトンやアリストテレスに古代哲学研究が限られがちであったが、セクストスの翻訳を通して、ヘレニズム哲学の分野においても日本の研究者が世界に向けて発信していく素地が整えられ、また古代認識論と他の時代の認識論の比較が容易になったことは、大きな意味をもつものである。

(2) 古代懐疑主義について本研究を通して得られた知見、あるいはこれからの研究の方向性として、簡単に箇条書きでまとめるなら、次の諸点を挙げることができよう。

① 古代懐疑主義は、「懐疑主義」を意味するギリシア語「スケプシス(考察)」が示すとおり、あくまでも考察を主軸とする立場であった。それは探求によって人間にとっての究極目的である「幸福」を目指すギリシア哲学の伝統的プロトレプティコス・ロゴスに根ざしている哲学の営みの基本でもあった。その意味で、探求による真理発見とは異なるデカルト的な方法的懐疑と親近性をもつ今日の懐疑主義とは異なる。

この違いは、ギリシア哲学それ自体が、元来、幸福を目指して知を愛する営みであったという事情と大きく関係している。そのためにプラトンのイデア論も展開され、ストア派、エピクロス派の哲学も展開されたのである。

② ただし、プラトン、アリストテレス

の時代とヘレニズム哲学の時代では政治的、学問的に状況が大きく異なっている。プラトンにおける哲学の主要な目標の一つは、ポリス単位の社会におけるよい政治の確立ということにあった。人間の幸福もポリスの中での幸福というものが主眼であった。

ところがヘレニズム時代になるとマケドニアの台頭によってポリスを主体とする哲学は揺らぎ始める。それによって人間の幸福も、政治とは切り離された次元で、心の平静（アタラクシア、無動揺）を求める傾向が強くなる。

③ また万学の祖たるアリストテレスが、マケドニアの後援のもと、それまでの哲学をまとめ上げ、自らの哲学を確立したことは、後の思想の潮流に大きな影響を及ぼすものであった。すなわち、後の哲学者たちは、イデア論を中心とするプラトン哲学と、質料と形相による合成体としてこの世界を捉える普遍実在論・経験主義のアリストテレス哲学という2大哲学体系を前にすることになったのである。

④ プラトンから離れる方向でアリストテレスがとった経験主義の方向性をさらに強化し、これに加えて、普遍の存在を否定する個物主義、さらには物質主義を採用したのが、ストア派の連続体論的哲学と、エピクロス派の粒子論的原子論哲学であった。個物主義と物質主義の徹底は、彼らが、個人的な心の平静（アタラクシア、無動揺）という点においてだけでなく、理論的にも、プラトン、アリストテレスと異なるものを提供するという野心のもとに哲学に従事したことを示唆する。

⑤ アルケシラオスがアカデメイアを懐疑主義へと方向転換したのも、このようなコンテクストのもとで解釈しうる。すなわち、アカデメイアの創始者プラトンが、善を頂点とするイデア論を提示したとき、そこには哲人王政治という理想があったが、一方ではその理想は容易には実現しがたい状況が生じてくる。

他方では、ストア派、エピクロス派の物質主義、個物主義のもと、イデアないしは普遍はその存在が完全に否定されることになる。そこで、アルケシラオスは、プラトン哲学がそこから発したソクラテス的論駁に立ち返り、批判に徹するという戦略をとった。ストア派が理想とする知者は、確固たる知を目指すソクラテス・プラトンの伝統上に位置づけうるのもであると同時に、ソクラテスが無知の自覚を重要視した点で、批判対象ともなりうるものであった。

⑥ ヘレニズム時代におけるストア派、エピクロス派、懐疑派アカデメイアの新た

な発達を考えると、古代ギリシアの競争的・論争的性格も視野に収めておく必要がある。プラトンが魂の3部分の一つに気概の部分を含めたように、ギリシアは格別に勝利とそれに伴う名誉を重んじる社会であった。とくに言論における勝利は、政治的にも大きな意味をもち、一方では説得の技術としての弁論術の発達をもたらした。また他方ではより優れた説得の技術を求めて、数学的論証の技法も発達することになった。そして両者とも、前者は論駁の技術発展という点で、後者は、攻撃を集中させる土台の明確化という点で、懐疑主義の進展に大きく寄与したのである。

⑦ プラトンもアリストテレスも、対話による真理探究を重視したが、その際、何をもって確実な真理とみなすかということは最重要の問題となり、定義などを含む諸仮設とそこからの妥当な推論の問題が、活発に議論され、ユークリッドに代表される幾何学の証明体系が整備されていくことになった。

⑧ またアリストテレスはその自然学において、原因、作用・被作用、全体と部分、物体、場所、動、時間、数、生成・消滅・変化などの基本概念を明確化した。しかも彼の著作は、さまざまな立場の対立をも明示的に示すものであった。なぜなら、アリストテレスは、著名な先行哲学者、また一般に受け入れられている意見には真実があるとして、それらを比較し、そこから彼が真理とみなすものを摘出していくという方法を使ったからである。この方法は、種々の思想に共通の原理的なものと派生的なものとを区別するのを可能にした。

⑨ さらにアリストテレスのこの方法は学説誌の伝統も生んだ。彼以降の哲学者たちは、過去の思想を体系的にまとめようと試みたのである。ここには、文字という思考・コミュニケーションの媒体の発達も関係しているであろう。子音だけでなく母音を表わす文字をも含むアルファベットという体系がギリシアに出現したのは前750年頃である。これによって書物の形で思想が記録されはじめたが、しかし、書物が高価であること、またパピュロス巻物としての扱いにくさのゆえに、哲学者たちは、学んだことをメモの形でまとめる必要性を感じたはずである。

⑩ こうしてまとめられた学説誌は、懐疑主義者にとっては非常に有効な道具となりえたであろう。アリストテレスは、比較することによってそこから真理を見出そうとしたが、懐疑主義者は賛否両論の対置を通して、判断保留に導こうとしたのである。

⑪ ピュロン、アルケシラオス、カルネ

アデスなど、懐疑主義者たちは本を執筆しなかったと言われている。彼らは、実際の議論において論敵を打ち破ることに自らの存在意義を見出した。しかし、自らは書物を執筆しなくても、書物を読み、覚え書・メモをとることは、彼らの活動にとって大きな意味をもっていたであろう。カルネアデスは、ストア派の諸著作、とくにクリシッポスの著作を熱心に研究してストア派諸説の論駁に役立てたと伝えられる。またアルケシラオスについても、過去の哲学者の書物を研究したことが伝えられている。彼らが自らは著作しなかったことも、相手に自分の立場を研究させ、論駁の糸口を与えることを避けたという戦略的意図がそこには認められるかもしれない。

⑫ しかし、セクストス・エンペイリコスになると事情は違ってくる。彼は、ペリパトス派、ストア派、エピクロス派、アカデメイア派の活発な議論の時代よりもずっと後に生きた。彼が目指したのは、論争よりもむしろ、過去の哲学の論争を振り返り、医者として——たんに彼自身、職業としていた肉体の医者としてのみならず、判断保留を通して無動揺（心の平静）へと導く魂の医者として——、その処方箋を残すことにあったと考えられる。その際、彼以前の哲学の伝統と、各思想の構造を明らかにする種類の学説誌の書物は、彼にとって非常に有効な道具となったと考えられる。彼は「ヒュポムネーマタ」を種々、著わした。「ヒュポムネーマタ」とは覚え書・メモを意味する。彼は、先行する諸思想を体系的に整理し、まとめ上げ、方法論的に整備したのである。

⑬ それは一方では、『ピュロン主義哲学の概要』中の判断保留の諸方式の整備に表われているし、他方では、『学者たちへの論駁』に認められる論駁の緻密な体系に表われている。後者においては、批判のために各思想の土台を明らかにし、その概念を明確化し、概念の矛盾を暴きだし、そしてその概念に相当するものは存在しえないという議論を一方において導くとともに、他方では、その存在を立論する議論も提示するという作業が非常に綿密に行なわれているのである。

⑭ 古代ギリシアの懐疑主義は考察を非常に重視する。アリストテレスは『形而上学』の冒頭、人間は生まれつき（自然本来的に）知ことを求める、と述べているが、「考察」それ自体に価値を認め、「ゼーテーテイクエ（探求主義、探求の生き方）」とも呼ばれた古代懐疑主義は、その意味で、たとえストア派などの主要哲学への対抗者であることをその特質とするとしても、

「哲学（ピロソ피아ー、知を愛し求めること）」の主流に位置づけられる。

⑮ しかし、古代懐疑主義が、他の哲学諸派と競合し、幸福、また善き生を提供すると約束しているとしても、はたして、本当に懐疑が幸福に通じるのであろうか。この問題を考える場合に、一方では、ソクラテスの存在が重要であろう。ソクラテスは、知に到達できなくても、探求に邁進し、そして探求それ自体に、善き生に通じる意味を見出した。対人論法に徹したアカデメイア派にとっては、探求を通して間違いを正すことに、死すべき人間が至りうる最高の知の到達点を認めたソクラテスの存在は大きな意味をもっていた。

⑯ 他方、ピュロン主義にとっては、無判断を通してアタラクシア（無動揺）に至ったとされるピュロンの存在が大きな意味をもっていたと推測される。とくに不安、悲しみ、怒りなどの否定的感情に左右され、動揺せざるをえないという人間の状況は、古代から現代にまで変わることがない。そのなかで人は何とかして心の平静を確保しようとするが、古代懐疑主義はそのための手段を提供しようと約束していた。

⑰ 感情と判断とどちらが主導的要素として働くのかという問題については、現代の心理学でも論争となっているが、近年のポジティブ・サイコロジーは、受動的にこむるネガティブな情態に心を開き、それらを判断なしにそのまま受け入れ、そして否定的判断に対してはdisputeの姿勢をもって臨むことが、ネガティブな感情を鎮静し、善き生を可能にする主張している。ピュロン主義者が、たとえ無動揺は得られないとしても、判断保留によって節度ある情態（メトリオパテイア）が確保されるとするのは、このような現代の心理学のトピックと重なるところが大きいと考えられる。

⑱ 最後に『学者たちへの論駁』第7巻～第11巻について簡単に述べておく。これらの諸巻に認められるのと実質的に同様の議論が『ピュロン主義哲学の概要』にも含まれている。しかし、議論は後者の方が明らかにより良く整理されている。このことは、後者が前者より後の作品である可能性をどちらかと言えば支持する。しかし、第7巻～第11巻の議論を詳細に見ていくと、そこには非常に緻密な構造が認められ、『ピュロン主義哲学の概要』に収まり切らなかった諸議論をまとめたとも解釈しうる。セクストス解釈の論争点の一つである執筆順序の問題については判断保留をするのが適当であるかもしれない。

⑲ 「倫理学者たちへの論駁」においてはとくに相対主義的な主張が多く認められ、

これをどう解するかが問題になる。相対主義と懐疑主義の矛盾と見えるものを Bett (Sextus Empiricus, *Against the Ethicists*) は強調しているが、矛盾する主張の双方を対置させるというピュロン主義の手法を考慮に入れるなら、セクストスが意図的に相対主義を利用している可能性は高い。これがセクストス自身の獨創性に基づくのかどうか、という点は、個々の論駁にセクストス自身が加えた要素の洗い出しも含めてこれからの研究の課題と言えるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

- ① 金山弥平、古代哲学におけるスケプシス——考察から懐疑へ——、東北哲学会年報、査読有、No. 26、2010、pp. 77-92
- ② 金山弥平、古代における書くことと読むこと、西洋古典学研究、査読有、58号、2010、pp. 112-114
- ③ 金山弥平、アルファベットの発明とその影響——プラトン『パイドロス』解釈のための「覚え書」、HERSETEC、査読有、Vol. 3 No. 2、2009、59-83
- ④ 金山弥平、ヘレニズムと近現代の哲学を動かした波: 「オシツ・オサレツ」(pushme-pullyou) 関係のなかの個人・社会・宇宙、アルケー、査読有、17号、2009、1-17
- ⑤ 金山弥平、What is It Like to Know Platonic Forms?: Knowing Meno, the Power of Dialogue, and the Cave and the Line, Journal of the School of Letters, Nagoya University、査読有、Vol. 5、2009、1-15
- ⑥ 金山万里子、『ピレモン書』覚え書、人文研究、査読無、39号、2008、44-62
- ⑦ 金山弥平、プラトン対話篇における正と負の感情——プラトン感情論に向けて——、名古屋大学哲学研究室、哲学フォーラム、査読無、5号、2008、25-34

[学会発表] (計5件)

- ① 金山弥平、古代哲学におけるスケプシス——考察から懐疑へ——、東北哲学会、2009年10月24日、新潟大学
- ② 金山弥平、書くことと読むこと、日本西洋古典学会、2009年6月6日、一橋大学
- ③ 金山弥平、ヘレニズムと近現代の哲学を動かした波——「オシツ・オサレツ」(pushme-pullyou) 関係のなかの個人・社会・宇宙——、関西哲学会、2008年10月19日、京都大学
- ④ 金山弥平、交響するコスモス—人類5000年の宇宙論: 古代ギリシアの哲学の視点から、「言語表象と数理的表象に基づく宇宙論の再構築」シンポジウム、2007年9月25日、名古屋大学
- ⑤ 金山弥平、プラトンの想起、メタファー、似像、handai metaphysica 研究例会、2007年8月3日、大阪大学

[図書] (計4件)

- ① 金山弥平、他、松籟社、交響するコスモス、上巻、人文学・自然科学篇、環境からマクロコスモスへ、2010、36-61
- ② 金山万里子、金山弥平、他、岩波書店、G. E. R. ロイド、古代の世界 現代の省察——ギリシアおよび中国の科学・文化への哲学的視座 (翻訳)、2009、91-208
- ③ 金山弥平、他、京都大学学術出版会、D. セドレー編著、古代ギリシア・ローマの哲学 (翻訳)、2009、147-184
- ④ 金山弥平、他、中央公論新社、哲学の歴史 第2巻、古代Ⅱ、帝国と賢者、地中海世界の叡智、2007、175-238、261-264

6. 研究組織

(1) 研究代表者

金山 万里子 (Kanayama Mariko)
大阪医科大学・医学部・教授
研究者番号: 10093189

(2) 研究分担者

金山 弥平 (Kanayama Yasuhira)
名古屋大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号: 00192542